



令和元年度

東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S-チル”

年次報告書

震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円10年間の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附をいただいで活動しています。



東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S-チル”

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

TEL&FAX : 022-795-3263

E-MAIL : s.children@sed.tohoku.ac.jp



この冊子は環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。





令和元年度 年次報告書

目次

■ 概 要・スタッフ	01
■ 活動内容	
Ⅰ. 当事者支援	
1. 相談実績	03
2. 親族里親サロン	08
3. 遺児・孤児対象学習支援	09
Ⅱ. 支援者支援	
1. 研修	11
2. ストレスマネジメント	11
3. 関係機関との連絡会議	11
4. 心理士派遣事業	11
Ⅲ. 普及・啓発	
1. 震災子ども支援室主催によるシンポジウム	13
2. 研修・講話・講演	14
Ⅳ. 情報収集とニーズの把握	
1. 講演会・研修会における情報収集	15
Ⅴ. 調査・研究	
1. 論文	15
2. 震災子ども支援室の活動のまとめ	15
Ⅵ. 広報	
1. 報道関係・来室対応	15
2. 出版物・報告書	16

令和元年度 「震災子ども支援室」活動報告

震災子ども支援室 室長 加藤 道代

● 概 要

令和元年度にも次々と災害はやってきました。令和元年10月12日、13日に日本列島を襲った台風19号は、記録的豪雨をもたらし、300近い河川の浸水被害を巻き起こしました。9月の台風15号、10月の台風19号、そして21号と、繰り返し豪雨被害に見舞われた地域もありました。被害に遭われた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

この台風被害の後、震災子ども支援室は、要望のあった被災自治体に心理士派遣を行い、乳幼児健診、発達相談等、自治体の母子保健業務支援にあたってもらいました。この専門職派遣事業は他市町村に向けて平成30年度より実施していたため、自治体との調整は速やかに進み、被害の2ヶ月後から対応することができました。

さて震災子ども支援室は、令和元年度も、当事者相談活動（電話相談、来所相談）、陸前高田と石巻を会場に行われた遺児・孤児対象学習支援活動（しゅくだい塾）、里親サロン活動、心理士派遣事業（南三陸町、七ヶ浜町）、シンポジウムの開催など、これまでの活動を継続して実施することができました。その中で、震災子ども支援室への電話相談は、例年に比べてぐんと減少しました。この点については、なかなか特定できる原因を考察できずにあります。自然減少ととらえることも可能かもしれませんが、令和2年度は東日本大震災から10年目を迎え、被災地にはあらたな思いや、年月では区切れない思いもあると思います。あらためて、真摯に相談対応ができるよう、気持ちを引き締めて参りたいと思います。

また、里親の皆さんのご協力を得て、里親養育への思いをまとめた小冊子『この子を育てて』が完成しました。震災後の混乱の中、親族で里親となられた方々は、必ずしも震災前から子どもと同居したり頻回に交流していたわけではない方々もおおいでした。それでも、「当然のこと」「当たり前のこと」として震災で親を失った子どもを引き取って育てることを決めて下さいました。ご自身も遺族であり、被災している場合もあったと思います。『この子を育てて』からは、様々な子どもの発達の課題と向き合いながら、時間の中で、次第に“家族”になってこられた様子がうかがえました。ご自身の体調の不安、子どもの進路や自立への気遣いなどをお聞きするにつけて、子育てを続けていらっしゃる里親さんへの支援の重要性を感じます。

同様に、厚生労働省の委託研究「東日本大震災における震災孤児等への支援に関する調査研究」に、室長の加藤がかかわり、震災孤児と里親へのアンケート調査とインタビュー調査、自治体と支援団体への調査を含めた報告書がまとまりました。そこから、震災孤児の方々が自ら述べてくれた言葉を知ることができます。アンケートであれインタビューであれ、調査というものは、常に何らかの侵襲性をもつことは否めません。正直なところ、遺族の方々への調査を実施するということについては、どこかに申しわけなさのようなものも感じていました。ところが、ある孤児の方から、「孤児がどのようなことで困っているか、今回のようなアンケートを今後も実施してほしい」という回答があったのです。その言葉に触れたとき、調査手法の限界を踏まえながらも、結果を正しく理解し伝えていくことこそが重要だという思いを新たにいたしました。実際、小冊子『この子を育てて』およびこのアンケート調査結果については、多くのメディアが関心を寄せて報道して下さいました。震災で親御さんを亡くされた子どもたちや、里親のその後について、社会が目を向け気持ちを寄せて下さることに感謝いたします。

全国から高校生が集まった真夏のオープンキャンパスは、広い講義室を会場として、パネル展示と説明等を行いました。毎年、学校にチラシやカードを配布してきたからでしょうか、高校生やご父兄の方が、震災

子ども支援室の存在を既にご存じだったのは大変嬉しいことでした。その一方で、現在の高校生は震災当時小学生だったことを考えると、東日本大震災の記憶のない世代が増えていることも実感します。「東日本大震災のことは、当然、皆知っているはず」と決めてかかるのではなく、いつ、どこで起こったどのような出来事であったのかについて、わかりやすく伝えていくことの重要性を感じます。オープンキャンパス当日は、会場に長時間滞在して、震災子ども支援室が作成してきた数多くの資料に目を通してくれる高校生たちの姿が見られ、大変心強く感じました。

緊急派遣スクールカウンセラーのヒヤリング調査は、その結果をもとに、令和2年8月の心理臨床学会において自主シンポジウムを開催し、心理臨床に携わる心理士の方々と議論を深める予定です。日本列島は、今後も災害が避けられません。その時、駆けつけることになる心理士の方々に、被災地に入り支援をするということの心の揺れや迷いについての議論を通じて学んでいただけることは大変有り難いことです。震災子ども支援室が任を終えても、支援リレーのバトンがつながってほしいと願っています。

ところで、令和2年の年明けより、新型コロナウイルス感染拡大という非常事態に全世界が見舞われています。実は、この原稿を書いている現在も、あらゆる地域、性別、年代の人たちの活動に制限措置がとられており、震災子ども支援室も、現時点において、通常の業務の多くが停止状態にあります。ただし、ささやかではありますが、対面を避けた電話相談と、開室から10年間の活動の中で、震災子ども支援室が見てきたこと、考えてきたことを書籍にまとめあげる作業は続けています。

地球規模の脅威に直面しながら、日常生活のひとつひとつについて自分がどう考え行動すればよいのかを問われているように思います。今は、コロナ禍が一日も早く終息に向かってくれることを祈りながらも、これまでもそうであったように、今、出来ることを粛々と行って参りたいと思います。皆様には、引き続き、震災子ども支援室へのご指導ご鞭撻を、何卒よろしく願いいたします。

令和2年5月

● スタッフ

室 長：加藤 道代（教育学研究科教育心理学講座 教授 臨床心理士・公認心理師）

研究員：一條 玲香（教育学研究科震災子ども支援室 臨床心理士・公認心理師）

相談員：平井 美弥（臨床心理士・臨床発達心理士・公認心理師）

相談員：押野 晶子（保健師・看護師）

相談員：大堀 和子（社会福祉士・精神保健福祉士）

事務員：嶺岸 真琴



平成23年3月20日 石巻市中瀬公園



令和2年3月29日 石巻市中瀬公園

1 相談実績

相談活動には、本人・関係者相談をはじめ、支援者へのコンサルテーション、情報交換やケース会議といった他機関との連携が含まれる。

● 総相談回数、ケース数及び月別相談回数

総相談回数は110回であった。前年度162回から大幅に減少した。特に、本人以外の関係者からの相談が減少した。理由の特定は難しいが、必ずしも問題の消失や解決だけではないかもしれない。震災から8年が経過し、直接震災との関係を言及し難い他の問題に散逸していたり、転化したりしている可能性も考えられる。また、来年で震災子ども支援室が閉室することを積極的に告知したため、相談をためらった可能性も考えられる。一方、例年同様、チラシ配布後の1～3月に相談の増加が見られた。

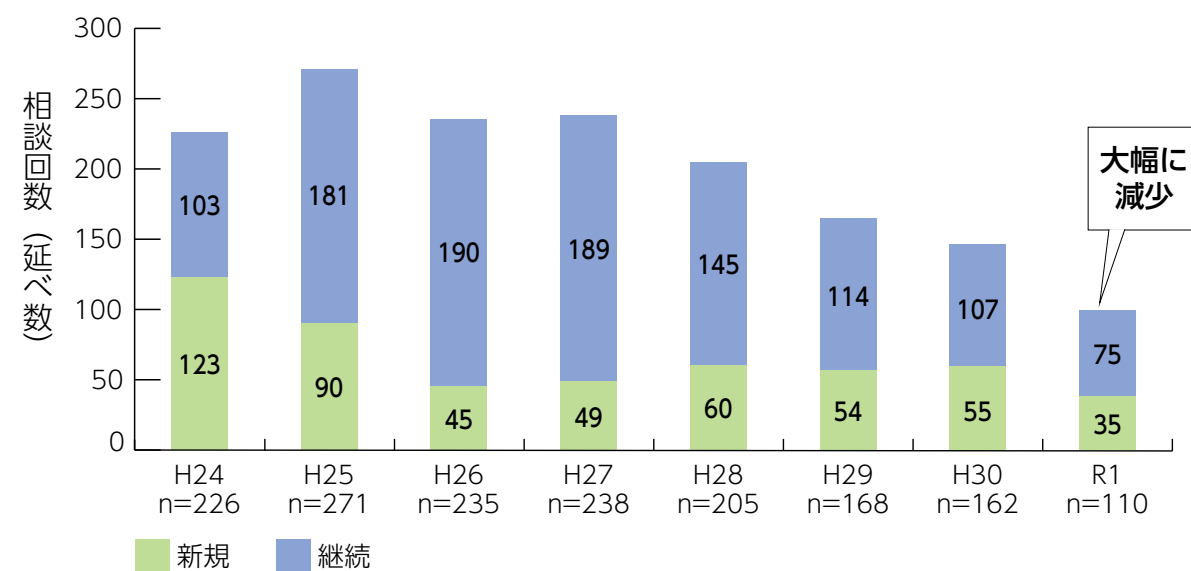


図1 総相談回数推移

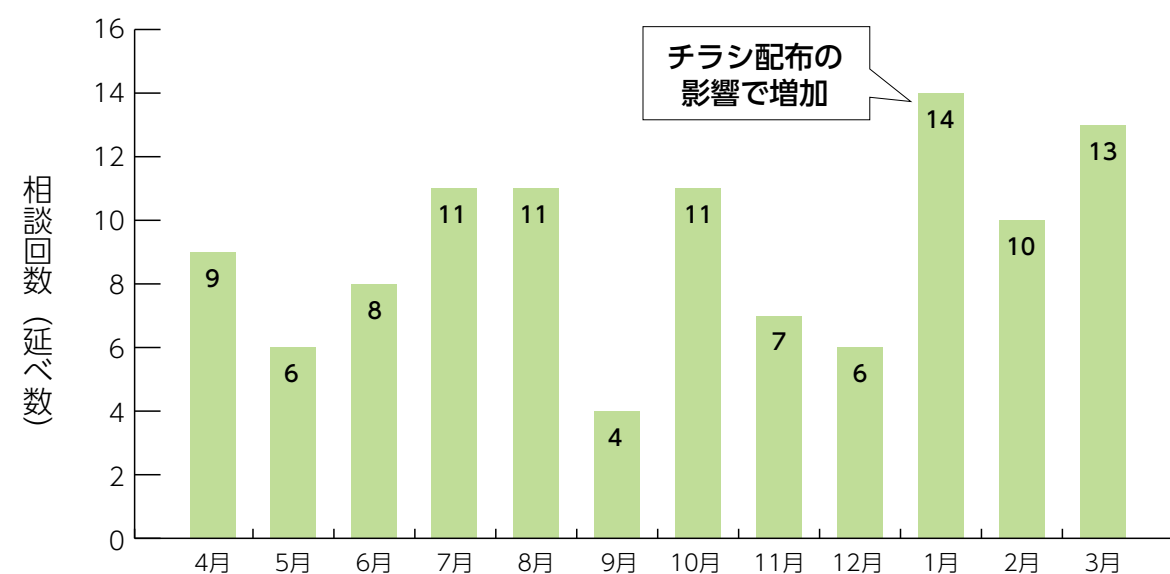


図2 月別相談回数

● 相談者地域

相談者を地域別にみると、例年通り「震災子ども支援室」が位置する宮城県からの相談が圧倒的に多い。

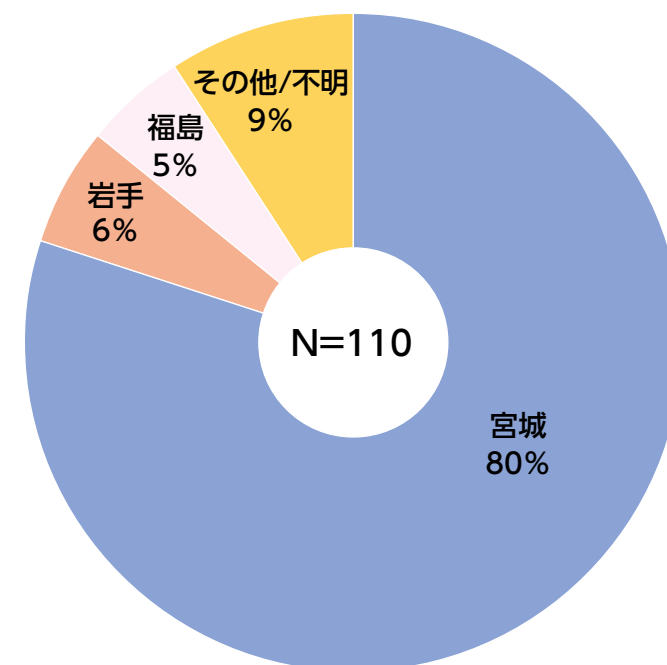


図3 相談者地域(%)

● 相談形態

電話での相談が最も多かったが、昨年度と比較すると電話相談の割合は、64%(104件)から52%(57件)と大幅に減少した。一方で、メールでの相談が11%(18件)から24%(27件)に増加した。メール相談は原則として実施していないが、継続相談者とのやりとりの中で必要時に使用することもあった。

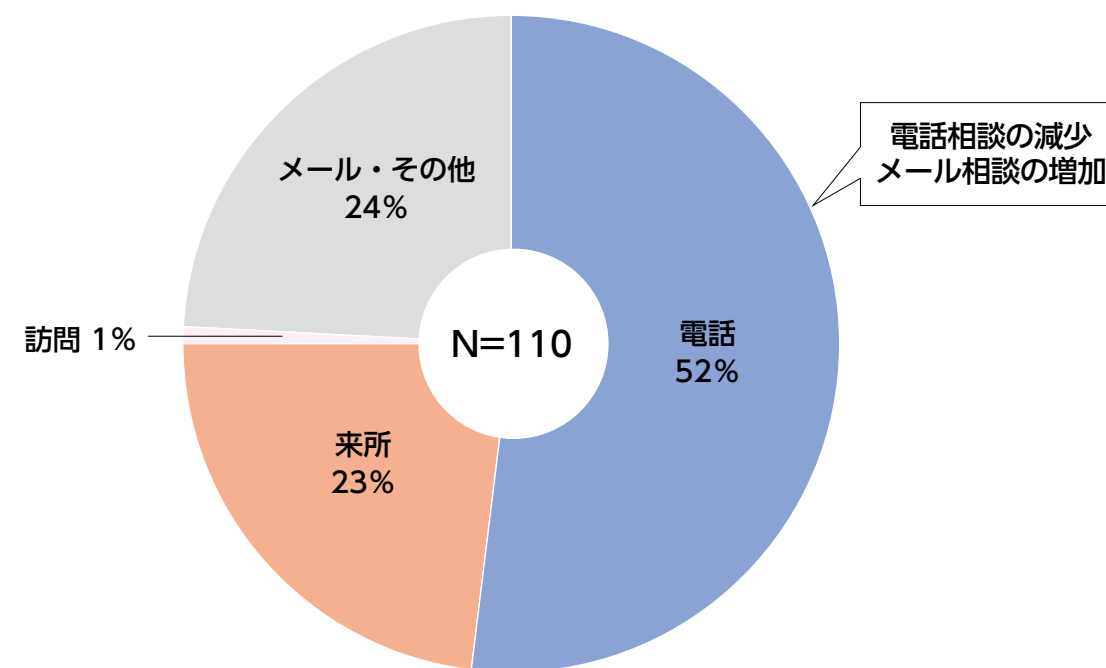


図4 相談形態(%)

● 相談内容

相談内容(相談回数(延べ数))は、「体調・精神不調」が前年度52回から9回に減少した。一方で「学校関係」が35回から52回に増加した。子どもの問題は、学校生活への不適応という形で表れやすい。また、背後に何らかの原因があっても学校生活を支援することで全体的な適応につながることもある。このため、学校生活に関する相談は支援の重要な糸口となる。なお、防災教育の影響についての相談もあり、今後の課題と思われた。

表1 相談内容別相談回数

	体調・ 精神不調	学校関係	子育て・ 発達	家庭環境	要保護・ 非行	その他	計
相談回数(延べ数)	9	52	22	4	1	22	110

「体調・精神不調」が減少、「学校関係」が増加

● 相談者推移

今年度は当事者本人からの相談が増加し、「行政・学校・関係機関」及び「母」からの相談割合が減少した。

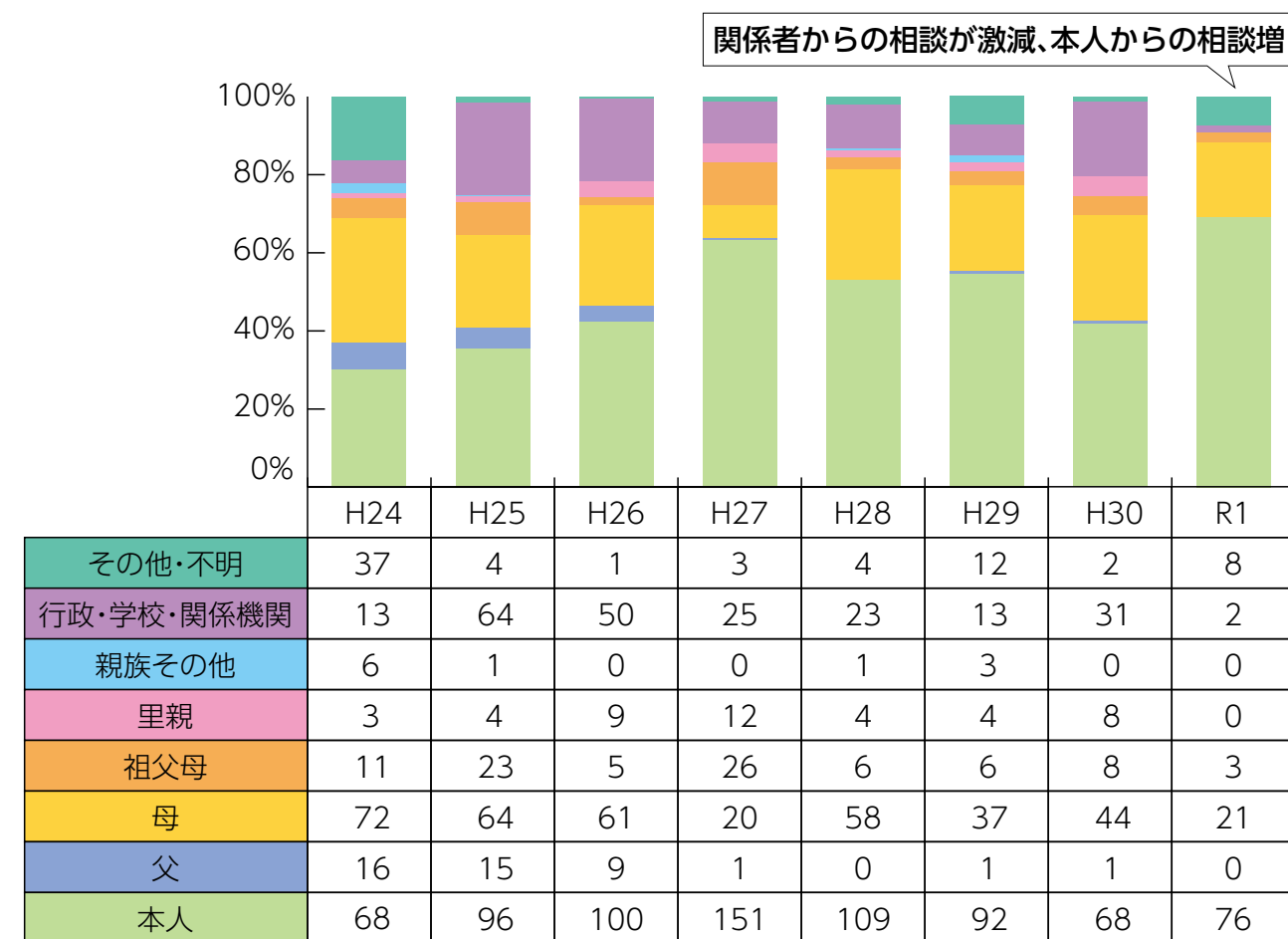
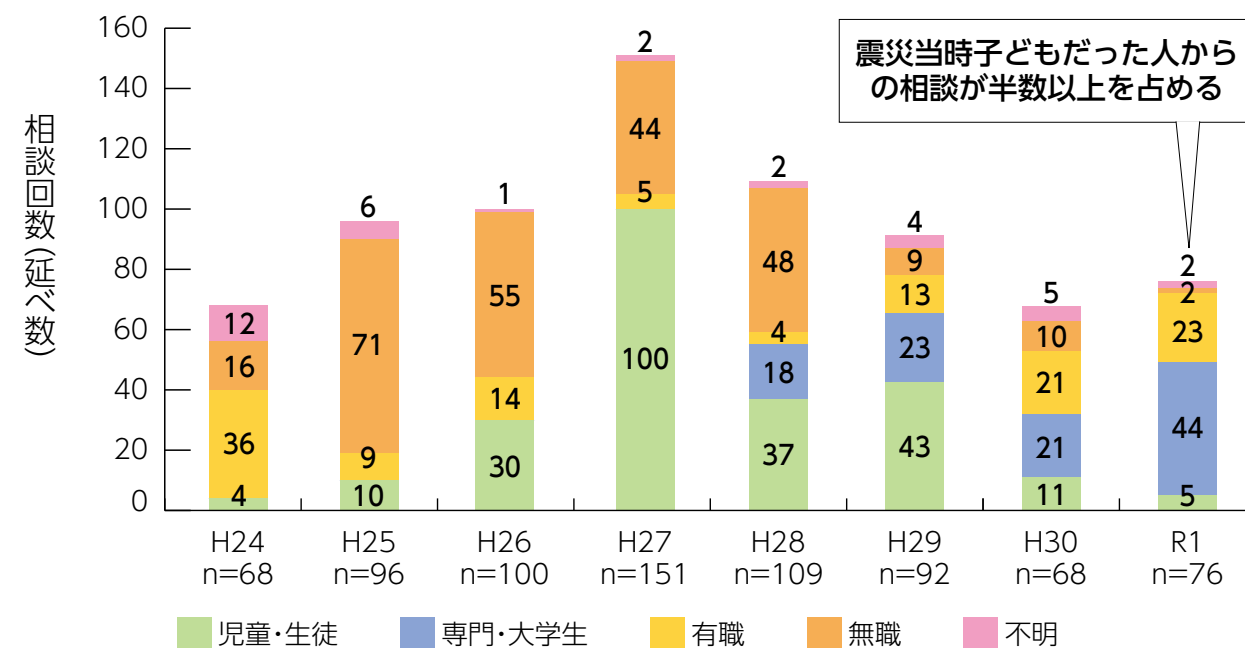


図5 相談者推移

● 本人相談

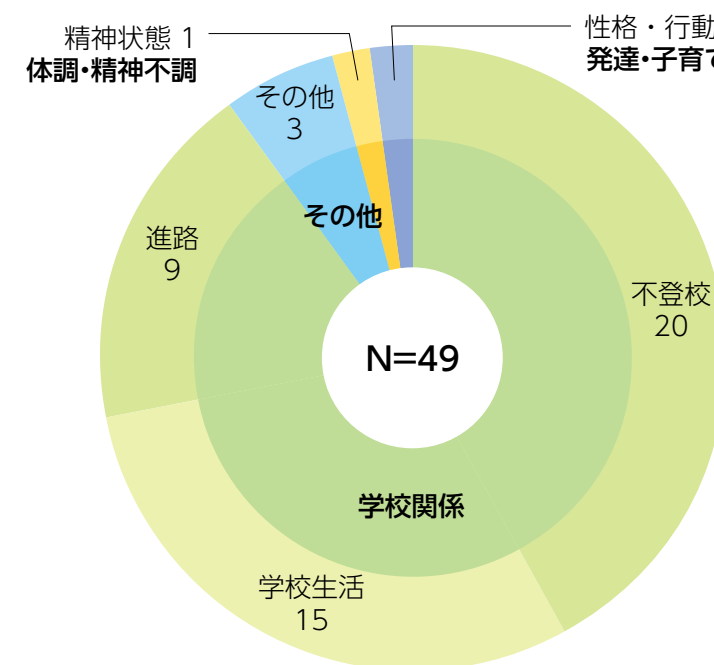
①相談者の属性推移

令和元年度は、「専門・大学生」本人からの相談が増加した。「有職」者には、学校を卒業し、社会人になってからも継続的に相談する人が含まれる。



②子ども(児童・生徒／専門・大学生)の相談内容詳細

「学校関係」の相談が約9割を占めた。継続して相談しているケースの件数が大きく影響した結果となった。



● 関係者(親族)相談

全体の相談回数は前年度の61回から24回に減少した。相談内容では、全体的に減少しているが、「子育て・発達」、「学校関係」などの相談が比較的多い。誰についての相談であるかを示す対象者では、「小学生」「中学生」に関する相談が多い。

表2-1 関係者(親族)の相談内容

	体調・ 精神不調	学校関係	子育て・ 発達	家庭環境	要保護・ 非行	その他	計
相談回数(延べ数)	3	8	9	2	1	1	24

表2-2 関係者(親族)相談における対象者の性別

	男	女	不明	計
相談回数(延べ数)	12	10	2	24

表2-3 関係者(親族)相談における対象者の属性

	幼児	小学生	中学生	高校生	専門・ 大学生	その他・ 不明	計
相談回数(延べ数)	0	9	8	3	3	1	24

● 行政・学校・関係機関による相談

行政・学校・関係機関相談には、コンサルテーションや情報交換、ケース会議などが含まれる。本年度は、昨年度の31回から2回に減少した。震災から8年が経過し、相談数全体が減少傾向にある中で、関係機関からの相談も減っていると考えられる。

表3 行政・学校・関係機関による相談の内容

	体調・ 精神不調	学校関係	子育て・ 発達	家庭環境	要保護・ 非行	その他	計
相談回数(延べ数)	0	0	2	0	0	0	2

2 親族里親サロン

2012年から、宮城県東部児童相談所、東部児童相談所気仙沼支所、みやぎ里親支援センターけやきとの共催で、震災孤児を預かっている親族里親に対して、親族里親サロンを行っている。里親サロンは「安心してゆっくりとくつろいでお話しできる場所」を目指したものであり、そのなかでは子育てについての話など、同じ立場だからこそ分かち合える場所として利用されている。

9年目になる今年は、里子が大学や就職等で措置解除を迎えた方もいた。措置解除後も親族里親サロンへのお誘いを継続することにより、これまでとは異なった立場で参加してくださる里親もあり、そうした方々から卒業後の様子などを伺うことができる貴重な場所となっている。残り1年間、現在里親として関わっていらっしゃる方、措置解除後の元里親との大切な交流の時間を過ごしていきたい。

	回数	日 時	参加者	スタッフ	場 所
石巻	1	2019/5/16(木)	1	4	石巻市中央公民館
	2	2019/10/24(木)	3	4	石巻市労働会館
	3	2020/2/13(木)	2	4	石巻市労働会館
気仙沼	1	2019/6/20(木)	1	4	本吉町公民館
	2	2020/3/12(木)	1	4	本吉町公民館



3 遺児・孤児対象学習支援

震災遺児・孤児への学習の場の提供及び、学習支援、ひとり親や親族里親に対するレスパイトや大学生スタッフとの交流を目的として、“しゅくだい塾”を行った。

しゅくだい塾の中で取り組んだことについて子ども達が各自記録をつけ、一日の活動の終わりに担当した大学生スタッフからのコメントを書いて渡し、家庭からのコメントも頂く「しゅくだい塾の記録」を昨年度に引き続き今年度も行った。また、昨年度石巻で行い、好評だった作文教室を今年は陸前高田レインボーハウスで行った。

陸前高田レインボーハウスでは、今年初めて合宿形式でのしゅくだい塾を開催した。

● しゅくだい塾の打ち合わせ

2015年から開催しているしゅくだい塾の開催時期や方法・内容の詳細についてあしなが育英会東北事務所のスタッフの方々と打ち合わせを行った。

2019年度事業に関する打ち合わせ(2019年5月9日)

2020年度事業に関する打ち合わせ(2020年3月9日)



“夏休みしゅくだい塾in石巻”

2015年から毎年行っている“しゅくだい塾”は、5回目となる。今年は例年に比べて、他の行事と重なってしまったせいか参加者がいつもの年よりも少なかったが、勉強やレクリエーションに取り組むエネルギーは高く充実した時間を過ごした。



開催日 2019年8月3日(土)～8月4日(日)

開催時間 8/3:11時～16時40分(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間含む)
8/4:10時～15時40分(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間含む)

開催場所 あしなが育英会石巻レインボーハウス

参加者 小学生4人、中学生5人(2日間延べ人数)

スタッフ 学生スタッフ4人、あしながスタッフ1人、
“S-チル”スタッフ1人

協力団体 あしなが育英会東北事務所

*朝始まりの会では体調チェックを行った。体調チェック後に、アイスブレイク(全員ジャンケン等のちょっとしたゲーム)を行い、お楽しみ会では「フルーツバスケット」等のゲーム等を行った。



“夏休みしゅくだい塾in陸前高田”

陸前高田での“しゅくだい塾”は今年で4回目となる。今年度は初めて合宿形式で行ったことで、これまで参加が難しかった遠方の子ども達にも参加してもらうことができた。作文教室を開催し、3名の講師の先生においでいただき、丁寧な指導を受けた。

開催日 2019年8月7日(水)～8月9日(金)

開催時間 8/7:16時45分～18時30分
(はじまりのわ、レクリエーション)
8/8:9時20分～17時30分
(50分1コマ×3、作文教室120分、レクリエーション、休憩時間含む)
8/9:9時20分～13時
(50分1コマ×2、レクリエーション、休憩時間含む)

開催場所 あしなが育英会陸前高田レインボーハウス

参加者 小学生12人、中学生4人、高校生7人(3日間延べ人数)

スタッフ 学生スタッフ9人、あしながスタッフ1人、
“S-チル”スタッフ2人

協力団体 あしなが育英会東北事務所

*朝始まりの会では体調チェックを行った。体調チェック後に、アイスブレイク(全員ジャンケン等のちょっとしたゲーム)を行い、お楽しみ会では「フルーツバスケット」等のゲーム等を行った。



“冬しゅくだい塾in石巻”

冬に開催するしゅくだい塾は2回目。当時、小学生だった子ども達が中学生となった。2月は期末試験の時期だったため、個別に試験対策ができて好評だった。

開催日 2020年2月15日(土)～2月16日(日)

開催時間 2/15:11時～16時30分
(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間含む)
2/16:10時～15時30分
(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間含む)

開催場所 あしなが育英会石巻レインボーハウス

参加者 小学生9人、中学生5人(2日間延べ人数)

スタッフ 学生スタッフ8人、あしながスタッフ2人、
“S-チル”スタッフ2人

協力団体 あしなが育英会東北事務所

*朝始まりの会では体調チェックを行った。体調チェック後に、アイスブレイク(全員ジャンケン等のちょっとしたゲーム)を行い、お楽しみ会では「伝言ゲーム」等のゲーム等を行った。



1 研修

● 公益財団法人 みちのく未来基金

みちのく未来基金は、2011年9月に震災遺児孤児を対象とした、高校卒業後の進学のための学費支援を目的に発足した。遺児孤児と面接を行うスタッフを対象に研修を行った。

(2019年8月27日 加藤)

● セケ浜町震災後の乳幼児発達支援研修会

子どもの発達支援の理解を深め、子どもの健やかな成長を支援することを目的に、公認心理師の富永恵子氏に依頼し、セケ浜町の乳幼児健診に従事している保健師・看護師・管理栄養士等の方々を対象に「乳幼児健診場面における観察視点と保護者への対応について」の研修を行った。

(2019年12月13日 押野)

2 ストレスマネジメント

● あしなが育英会東北事務所

震災子ども支援室職員がこれまで行ってきたセルフケアやチームケアについて、情報提供と方法について助言を行った。

(2020年1月9日 平井、大堀)

3 関係機関との連絡会議

● 南三陸町子ども支援連絡調整会議

2012年度から震災後の子ども達の心身と健全な発達の支援を目的とし、南三陸町保健福祉課の主催で、「南三陸町子ども支援連絡調整会議」が行われてきた。“S-チル”では、連絡調整会議の開始当初から運営協力を行ってきた。調整会議の実施によって、学校や保育所等、地域の乳幼児・児童・生徒関連施設と保健福祉課が情報交換し、相互連携を深めている。今年度は夏と冬の2回開催し、各施設から見えてくる子どもや子どもをとりまく状況を共有した。

(2019年8月1日、2020年1月29日)

4 心理士派遣事業

震災後、被災地支援を目的に子どもと保護者の心の健康をサポートするため、市町村の乳幼児健診に心理士が配置されてきた。震災から9年が経過し、一部市町村では予算的な問題等で配置が縮小されてきている。各市町村からの乳幼児健診の場面での心理士によるサポートが必要との声を受け、“S-チル”はニーズのある市町村に心理士を派遣する事業を開始した。今年度は南三陸町の乳幼児健診(1歳半健診・発達相談)、セケ浜町では保育所や幼稚園巡回相談、発達相談の事業に従事した。また2019年10月に発生した台風19号の影響で被災した大郷町の乳幼児健診(2歳半健診・3歳児健診)と発達相談(のびのび相談)に心理士の派遣を開始し、2020年度は乳幼児健診に保健師も派遣することとなっている。南三陸町とセケ浜町への派遣は今年度と同様に予定している。

	内 容	日 時	対 応 人 数	場 所
セケ浜町	発達相談	2019/6/18	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/7/3	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/7/19	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/8/2	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/8/21	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/11/6	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/11/18	2	セケ浜町母子保健センター
		2019/12/4	1	セケ浜町母子保健センター
		2020/2/19	1	セケ浜町母子保健センター
	巡回相談	2019/6/3	10	汐見台幼稚園・保育園
		2019/6/5	5	和光幼稚園
		2019/6/7	7	遠山幼稚園・保育園
		2019/6/10	4	第二柏幼稚園
		2019/6/19	5	遠山保育所
		2019/10/16	6	和光幼稚園
		2019/10/23	6	遠山幼稚園・保育園
		2019/10/25	5	汐見台幼稚園・保育園
		2019/10/30	5	遠山保育所
		2019/12/3	3	第二柏幼稚園
南三陸町	育児相談	2019/5/23	3	町立名足子ども園
		2019/8/8	10	伊里前保育所
		2019/10/29	2	町立戸倉保育所・保健センター
		2019/12/10	1	あさひ幼稚園・保健センター
	1歳半健診	2020/2/20	4	入谷ひがし幼児園
		2019/6/10	2	南三陸町総合ケアセンター健診室
		2019/7/8	—	都合によりお休み
		2019/9/18	2	南三陸町総合ケアセンター健診室
		2019/11/11	全体観察	南三陸町総合ケアセンター健診室
		2020/1/24	2	南三陸町総合ケアセンター健診室
大郷町	2歳児健診	2020/1/23	2	大郷町母子保健センター
	3歳半健診	2019/12/11	3	大郷町母子保健センター
		2020/3/18	1	大郷町母子保健センター
	のびのび相談	2019/12/17	—	対象者なしのため取止め
		2020/1/28	2	大郷町母子保健センター
		2020/2/18	1	大郷町母子保健センター
		2020/3/24	—	対象者なしのため取止め

● 心理士派遣事業の振り返り・次年度の打合せ

セケ浜町健康増進課保健指導係
南三陸町保健福祉課健康増進係
大郷町保健福祉課

(2020年1月22日)
(2020年1月29日)
(2020年3月17日)

1 震災子ども支援室主催によるシンポジウム

● シンポジウム

東日本大震災後の子どもたちへの支援
～心理士からみた震災～

東日本大震災から9年目を迎えようとする中、これまで被災地で子どもたちを支援してきた3名の心理士の方に、支援内容や活動を通じて感じた思いなどをご報告いただいた。参加者からは多くの質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われた。
(2020年2月22日(土)東北大学マルチメディア教育研究棟6階大ホール、参加者52名)

報告
1

「活動を通して子どもの変化から感じること」



社会福祉法人大洋会
児童家庭支援センター大洋
支援相談員兼心理療法士
(臨床発達心理士)
大和田 綾子氏

児童養護施設での勤務を経て、震災時は児童家庭支援センターで相談対応に携わっていた。担当地域は、岩手県陸前高田市。発災後は通常業務に加え、県外からの医師らでつくる「心のケアチーム」と一緒に活動し、新たな人との出会いから活力、様々な視点をもらった。子どもの支援に当たるときは、その子自身の回復のペースを大事にし、寄り添う姿勢が重要だ。他機関の力を借りたり、繋いだりすることを支援の一環に入れる必要もある。日頃から地域の関係機関がうまく連携し、丁寧な繋ぎを行っていれば、災害があっても必ず機能し、繋がりがやすく、相談しやすいシステムができる。そうなれば、子どもだけではなく、どのような人にも優しい社会になると考えている。

報告
2

「震災後の乳幼児健診における心理支援活動」



仙台市児童相談所保護支援課
親子こころの相談室他
(公認心理師・臨床心理士)
二井 奏子氏

震災の翌年から現在まで、宮城県内の沿岸地域にある計4市町の乳幼児健診で心理相談に携わってきた。震災以降、保護者のストレスが蓄積し、震災から9年経った今でも、子どもの心を含め、生活全体に影響が出ていると感じる。心理相談に当たっては、健診スタッフや保育者など支援者のニーズと保護者の気持ちをそれぞれ理解し、両者を繋ぐことを心掛けている。健診スタッフと協働して相談に当たることも大事だと考える。今後も、被災地では震災の影響が今なお大きいことを常に意識し、自分の被災地に行くことに対する構えた姿勢や「何かしなくては」という思いが心理支援に与える影響も自覚しておきたい。

報告
3「東日本大震災後から現在までの、
子どもたちへの支援を通して得られた気付き
～現地のスクールカウンセラーの立場から～」

宮城県スクールカウンセラー他
(公認心理師・臨床心理士・家族相談士)
鈴木 正貴氏

スクールカウンセラー(以下、SC)として約15年、学校に勤めている。震災直後から、勤務校での生徒との面談、宮城県内の沿岸部の小中学校への緊急派遣としての避難所訪問など、様々な形で子どもたちの支援を行ってきた。子どもの心を支えるためには、日頃から関わりのある教職員の寄り添いや支えが大切で、SCは直接的な支援以外に教職員の側面的支援を図ることも重要だ。震災からもうすぐ9年経つが、被災された方々の心の復興はなされておらず、今後も子どもたちの心を含めその影響はあるだろう。SCは勤務校内はもちろん、必要時は外部機関とも他職種連携を図り、学校全体をサポートし続けることが望ましい。

2 研修・講話・講演

● 南三陸町子育て支援センター

震災子ども支援室の心理士派遣事業に従事している、公認心理師・臨床心理士の二井奏子氏が「子育て講話～子どもを理解し、気持ちに添う～」をテーマに、南三陸町子育て支援センターにおいて講話を行なった。同センターを利用している0～3歳までの子どもを持つ親子7組と保育士の方々が参加した。

(2019年8月1日)

● 全国青年司法書士会研修会

全国青年司法書士協議会主催の全国研修会において、『震災孤児の現状とその課題～震災孤児の「幸」に向けて～』というテーマで発表した。

(2019年9月14日 平井)

● 東北大学課外ボランティア活動支援センター

東北大学全学教育において、東北大学課外ボランティア活動支援センターが担当する「東日本大震災からみる現代日本社会」の授業のなかで、「震災子ども支援室(S-チル)の取り組みから見える被災地の変化」と題し学生に向けて講義を行った。

(2019年12月23日 加藤)

Ⅳ. 情報収集とニーズの把握

1 講演会・研修会における情報収集

2019年12月15日 日本臨床心理士資格認定協会主催
「令和元年度 心の健康・文化フォーラム
子どもの心を育み培う地域文化力を考える
―臨床心理士と心の文化創造への期待と展望―」（一條出席）

Ⅴ. 調査・研究

1 論文

加藤道代・一條玲香（2019）
東日本大震災後の電話相談における相談員の対応
―東北大学大学院教育学研究科「震災子ども支援室」における6年間の相談記録の分析―
東北大学大学院教育学研究科研究年報, 67(2), 77-89

2 震災子ども支援室の活動のまとめ

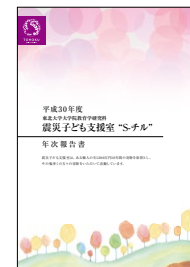
2019年 6月25日 心理士派遣事業についてのヒヤリング(山元町)
7月 2日 親族里親サロンスタッフ座談会
8月24日 しゅくだい塾スタッフ座談会
2020年 1月22日 心理士派遣事業についてのヒヤリング(七ヶ浜町)
1月29日 心理士派遣事業についてのヒヤリング(南三陸町)
2月24日 心理士派遣事業スタッフ座談会

Ⅵ. 広報

1 報道関係・来室対応

2019年 10月 2日 朝日新聞仙台支局(2019.12.15記事)
12月26日 NHK仙台放送局(2019.12.28放送)
2020年 2月14日 朝日新聞仙台支局(2020.3.30記事)
2月18日 東北放送ラジオ(2020.3.12放送)
3月12日 NHK仙台放送局
3月19日 朝日新聞仙台支局(2020.5.14記事)

2 出版物・報告書

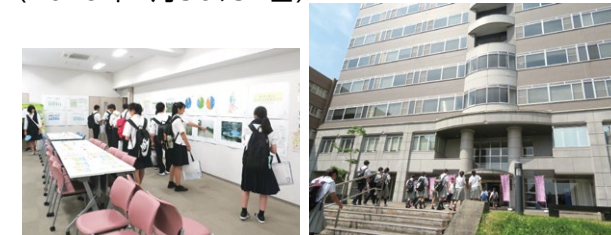
1 「問題行動を呈する
子どもの支援
～発達障害を中心に～」
報告書2 平成30年度
震災子ども支援室
“S-チル”
年次報告書3 震災子ども支援室
講演会報告書
「東日本大震災後の
子ども達への支援
～8年間の診療と
研究からみえるもの～」4 震災里親家庭及び
養育に関する
調査報告書5 小冊子
「この子を育てて
～東日本大震災後の
親族里親の声から～」

6 “S-チル”ニュースレターの作成と配布



7 ホームページとFacebookの更新

8 震災子ども支援室各チラシの増刷と配布

9 東北大学オープンキャンパスに出展
(2019年7月30、31日)

ご希望される方には、2011年度からこれまでに作成した各種報告書を郵送いたします。ご希望の冊子(複数可)、ご氏名、ご郵送先、ご所属をお書き添えの上、以下の問い合わせ先までご連絡下さい。

問い合わせ先

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 E-mailアドレス s.children@sed.tohoku.ac.jp

編集者

加藤 道代	東北大学大学院教育学研究科教授 震災子ども支援室室長
一條 玲香	震災子ども支援室学術研究員
平井 美弥	震災子ども支援室主任相談員
押野 晶子	震災子ども支援室相談員
嶺岸 真琴	震災子ども支援室事務員

令和元年度

東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S-チル”
年次報告書

2020年6月1日

発行者	東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
代表者	加藤 道代
住所	仙台市青葉区川内27-1
Tel/Fax	022-795-3263
E-mail	s.children@sed.tohoku.ac.jp

